

〈研究論文〉

A. スミス『国富論』邦訳諸版について
——その例示的比較の試み——

杉山忠平

(経済資料協議会特別会員)

アダム・スミスの『国富論』は、1776年の初版いらい、10年後の第4版を除き、生前最後の版である1789年の第5版まで、補正がつけられた。そのことの意味、各版間の異同は興味ある問題であるが、ここではふれない。それぞれ簡単にはあるが、ふれられた先例があるからである（たとえばW.B.トッド「『国富論』の形成——初版から第5版まで——」, 「刊行200年記念ファクシミリ版アダム・スミス著『国富論』解説」所収, 雄松堂書店, 1976, pp.1-17; 田添京二「『国富論』各版の異同について」, 大河内一男監訳『国富論』, 中央公論社, 1988, pp.1545-1553）。

同様に興味あるのは、各種の同書邦訳版についてであろう。石川暎作・嵯峨正作訳（1884-1888）いらい、完訳本だけでもこれほど何種類も出ている国は、おそらく、他に例がないであろう。それらの異同や優劣を逐一比較検討することは、接近の容易な戦後版にかぎっても、とうていできないので、邦訳版への批判書を材料にして、当該箇所が各訳書によってどう訳されているかを対比することとする。ただし当該箇所についての各訳書の当否優劣は、ここでは問題とすることができない。ただそのための材料を提供するにとどめることとする。また批判書そのものの当否も同様とする。

その批判書としては、別宮貞徳『統訳訳迷訳欠陥翻訳』（文芸春秋社, 1983）が一部を『国富論』邦訳批判にあてている（「統」でない1981年版はスミス訳を扱っていないが、それは主として水田洋訳を対象としていて、他はほとんどといってよいほどわずかしか扱っていない。しかしこれもその当否を検討するのではなく、そのための一つの材料とするにとどめる。

別宮著のほかにも竹内謙二『誤訳』（有紀書房、1964）があり、これは別宮著とことなり、主としてといてよいほどに『国富論』を多く扱っているが、しかし批判の対象がより断片的で、また出版年からいって当然ながら、より古く（岩波文庫版でも現行の大内兵衛・松川七郎訳よりも、主としては、そのもとである大内兵衛訳を対象とし、水田訳も、より後年の全訳でなく、抜萃版——河出書房新社、1963——）である。また竹内氏自身が『国富論』の訳者でもあるから、かつ何よりもスペースの制約もあるので、ここでは別宮著を主たる材料とし、竹内著を従たる材料とすることにする。

なお、該当箇所原文は大内・松川訳と竹内訳がキャン版、水田訳が1776年版、大河内監訳が1789年版を使用しているが、ここではすべて、便宜上、キャン版で示すこととした。

なお、別宮氏および竹内氏の批判が関連文脈全体にたいしてだけでなく、個別的箇所を対象とする場合には、当該箇所にアンダーラインを付しておいた。

Were we to examine, in the same manner, all the different parts of his dress and household furniture, the coarse linen shirt which he wears next his skin, the shoes which cover his feet, the bed which he lies on, and all the different parts which compose it, the kitchen-grate at which he prepares his victuals, the coals which he makes use of for that purpose, dug from the bowels of the earth, and brought to him perhaps by a long sea and a long land carriage, all the other utensils of his kitchen, all the furniture of his table, the knives and forks, the earthen or pewter plates upon which he serves up and divides his victuals, the different hands employed in preparing his bread and his beer, the glass window which lets in the heat and the light, and keeps out the wind and the rain, with all the knowledge and art requisite for preparing that beautiful and happy invention, without which these northern parts of the world could scarce have afforded a very comfortable habitation, together with the tools of all the different workmen employed in producing those different conveniences; if we examine, I say, all these things, and consider what a

variety of labour is employed about each of them, we shall be sensible that without the assistance and co-operation of many thousands, the very meanest person in a civilized country could not be provided, even according to, what we very falsely imagine, the easy and simple manner in which he is commonly accommodated.

(別宮, p. 252: I, pp. 13-14)

〔大内・松川訳〕

同じようにして、われわれがかれの衣服や家具のすべてのさまざまな部分を検討するならば、すなわち、かれがその皮膚にじかに着るごつごつした亜麻のシャツ……さらにまた、そういうさまざまな便益品の生産に従事するすべてのさまざまな職人の道具類とともに、わたしはいう、もしわれわれがこういういっさいのことがらを検討するならば、そしてそれらのおのおのについてどれほどさまざまな労働がついやされているかということ考察するならば、われわれはいく千人もの助力や協働なしには、文明国のもっともいやしい者に、われわれがはなはだしく誤って簡単で単純な様式などと想像しているような、ありふれた家財道具をととのえてやることさえできない、ということを理解するであろう。(一)114-5)

〔水田訳〕

おなじようにしてわれわれが、かれの衣服と家庭用具のさまざまな部分のすべてを、点検することになれば、すなわち、かれが膚につける粗い亜麻のシャツ、……さらにくわえて、これらのさまざまな便宜品を生産するのに従事する、すべてのさまざまな職人の道具、つまり、これらすべてをわれわれが点検し、これらのおのおのについてどんなに多様な労働が使用されているかを、考察するならば、何千もの人の援助と協力なしには、文明国でいちばんいやしい人物でさえも、われわれが手軽で単純だいたいへんまちがって想像しているような、かれが通常くらしている様式においてさえ、生活資料を供給されえないということが、わかるであろう。(上)18-19)

〔竹内訳〕

この調子で、羊飼いの衣服家具のあらゆる部分、肌着の粗末なりネンのシャツ、……これら種々なる便利品の生産に従事するあらゆる労働者の用いる工具などを一々取調べるとしたならば、今もいう通り、もし吾々がこれらの物をみな仔細に点検し、そしてその各々について如何に多種多様の労働が投じられているかを考えて見るならば、……文明国に住むいかに貧賤な者でも、平素衣食住して行く単純簡易な生活様式——と吾々の想像するのは甚だ間違っている——ですら、到底暮しては行けないことを知るであろう。(L17)

〔大河内監訳〕

同じように、われわれが牧羊者の衣服や家具のさまざまな部分のすべて、すなわち、かれがその皮膚にじかに着るあらい麻布のシャツ、……さらに加えて、このようなさまざまな便益品の生産に従事するさまざまな職人たちのすべての道具類を調べてみるならば、つまり、以上すべてのものをわれわれが調べて、そしてそれらのおのおのについて、どんなにさまざまな人手が用いられているかを考察するならば、文明国の最も下層の者にたいしてさえ、何千人という多数の助力と協同がなければ、手軽で単純な様式だとわれわれが誤って想像しているような普通の暮しぶりすらととのえてやることができない、ということがわかるだろう。(22)

That sea, by far the greatest inlet that is known in the world, having no tides, nor consequently any waves except such as are caused by the wind only, was, by the smoothness of its surface, as well as by the multitude of its islands, and the proximity of its neighbouring shores, extremely favourable to the infant navigation of the world; when, from their ignorance of the compass, men were afraid to quit the view of the coast, and from the imperfection of the art of ship-building, to abandon themselves to the boisterous waves of the ocean.

(別宮, p. 245: I, p. 21)

〔大内・松川訳〕

世界きっての最大の入江で、潮の干満がまったくなく、したがって風がおこすほか波一つたないこの海は、海面がしずかなこと、また数多くの島があること、さらには隣接する岸がちかいことのために、幼年時代の世界海運にとってはなほだしく好つごうであったし、また当時の人々は、羅針盤を知らなかったから、海岸線を見失うことを恐れ、また造船術も不完全であったから、大洋の荒れ狂う大波に身をまかすことを恐れていたのである。 ((-)128-129)

〔水田訳〕

この海は、世界でしられているかぎり、とびぬけて最大の内海であって、そこには、潮の干満がなく、したがって風だけによっておこるものをのぞけば波がないので、その海面のおだやかさも、その島の数のおおさおよび沿岸の近さがあいまって、幼年期の世界の航海にとって極度に好都合であった。その当時、人々は、羅針盤をしらぬために、海岸を見うしなうことをおそれ、造船技術の不完全から、大洋のあら波に身をゆだねることをおそれていたのである ((上)24-25)

〔竹内訳〕

けだし世界最大の内海であり、潮流はなく、従って専ら風による外波の立たない地中海は、海面静穏で無数の島々があり、又海岸が相接しているから、幼稚な当時の世界海運にとっては甚だ好都合であった。別けても羅針盤を知らないため海岸線を見失うことを恐れ、造船術未熟のため大洋の荒波に、運命を任すことをおそれていた当時においては。 ((上)26-27)

〔大河内監訳〕

この海は、世界に知れわたった最大の内海で、潮の流れがなく、したがって風がひきおこすほかには波一つ立たないので、その海面がおだやかであるばかりか、その島の数が多いこと、また隣接する海岸が近いことのために、幼年期の世界の海運にとって、すこぶる好都合であ

った。その当時は、人々は羅針盤を知らなかったために、海岸線を見失うことを恐れ、そのうえ造船技術が未熟だったために、大洋の荒れ狂う波に身を挺することを恐れていた。(35)

As it cost less labour to bring those metals from the mine to the market, so when they were brought thither they could purchase or command less labour;

(竹内, p. 36: I, p. 34)

〔大内・松川訳〕

それらの金属を鉱山から市場へもたらすのには比較的わずかの労働が
ついやされたから、それらの金属がそこへもってこられたときにもま
た、比較的わずかの労働を購買または支配しうるにすぎない。(一)
155)

〔水田訳〕

それらの金属を、鉱山から市場にもってくるのにかかる労働がすく
なくなるに~~応じて~~、それらが市場にもってこられたばあいには、購買ま
たは支配しうる労働も、すくなくなった。(上34)

〔竹内訳〕

けだしこれらの金属を鉱山から市場に搬出するのに費す労働が減少し
たから、市場に搬出された暁、その購買又は支配しえた労働も減少し
た。(上 pp. 42-43)

〔大河内監訳〕

それらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう
少なくなったので、それらの金属類が市場へもたらされたときに、購
買または支配できた労働もいっそう少なくなった。(57)

In exchanging the complete manufacture either for money, for labour, or
for other goods, over and above what may be sufficient to pay the price

of the materials, and the wages of the workmen, something must be given for the profits of the undertaker of the work who hazards his stock in this adventure.

(別宮, pp. 233, 250: I, p. 50)

〔大内・松川訳〕

その完製品を貨幣・労働またはその他の財産のいずれかと交換するばあいには、こういう冒険に自分の資財をあえて投じるこの事業の企業家にも、その利潤として、原料の価値や職人の賃銀を支払うにたりるものをこえるものがあたえられなければならない。(←187)

〔水田訳〕

完成品を、貨幣か労働か他の財貨と交換するにあたって、原料の価格と職人の賃銀とを支はらうにたりるであろうところをこえて、このしごとの企業者の利潤として、いくらかがあたえられなければならないのであって、かれはこの冒険に自分の資材をあえて投じたのである。(↑46)

〔竹内訳〕

その完成品を貨幣となり、労働となり、或は他の財と交換するに当っては、己の資本を賭してこの投機事業をやって見るこの事業の企業家への利潤として、原料の価格と労働者の賃銀とを支払うに足る可きものの外に、なお其上あるものが与えられねばならぬ。(↑64)

〔大河内監訳〕

完成品を、貨幣なり労働なり他の財貨なりと交換する場合には、こうした冒険に自分の資本を^{ストック}思いきって投じるこの企業家にたいして、その利潤として、原料の価格と職人の賃銀とを支払うのに足る以上に^{なにか}が与えられなければならない。(82)

Unless they yield him this profit, therefore, they do not repay him what they may very properly be said to have really cost him.

(別宮, p. 235 : I, p. 58)

〔大内・松川訳〕

それゆえ、この財貨がかれにこういう利潤を生みだしてくれるのならともかく、そうでないかぎり、この財貨は、かれがそのために現実についやしたと当然主張しうるものをかれに払いもどしてはくれないのである。(→203)

〔水田訳〕

したがってこれらの財貨が、かれにたいしてこの利潤をうまぬかぎり、それらがじっさいにかれにとってかかると、まったく正当にいわれうるものを、それらはかれにはらいもどさないのである。(↑53)

〔竹内訳〕

されば、その貨物が彼にこの利潤を与えなければ、この貨物は彼がそのために真に費したと言って然るべきものを、彼に償還しないわけである。(↑75)

〔大河内監訳〕

したがって、この財貨がかれにこうした利潤をもたらさないならば、その財貨はかれにたいして、まさにかれが実際に費やしたといえるものを払いもどしていかないことになる。(95)

Masters are always and every where in a sort of tacit, but constant and uniform combination, not to raise the wages of labour above their actual rate.

(竹内, p. 56 : I, p. 68)

〔大内・松川訳〕

親方というものは、いつでも、またどこにいても、ある種の暗黙のうちに、不断に統一的な団結をむすび、労働の賃銀をその実際の率以上にひきあげまいとしている。(→225)

〔水田訳〕

親方たちは、つねにどこでも、一種の暗黙の、しかし、恒常的で一様な団結をむすんで、労働の賃銀をそのじっさいの率よりあげまいとしている。(上62)

〔竹内訳〕

雇主は常に、又どこでも、労働の賃銀をその現実の率以上に上げないために、一種暗黙の、が不断の、そして一様な団結を結んでいる。(上90-91)

〔大河内監訳〕

親方たちは、いつどこにあっても、一種暗黙の、しかし不断の、統一的な団結をむすんで、労働の賃銀を現在の率以上に高くしないようにしている。(114)

Thus far at least seems certain, that, in order to bring up a family, the labour of the husband and wife together must, even in the lowest species of common labour, be able to earn something more than what is precisely necessary for their own maintenance;

(別宮, p. 226; 竹内, p. 57: I, p. 70)

〔大内・松川訳〕

以上に述べられているかぎりでも、最下層の種類のおつうの労働者のばあいさえ、一家を養育するためには、夫婦がいっしょになって、かれら自身の生活維持費としてぎりぎりが必要とされるものよりも、いく分多く稼得することができなければならないであろう、ということとはすくなくともたしかだと思われる。(一)228)

〔水田訳〕

すくなくとも、つぎの点までは、かくじつだとおもわれる。すなわち、一家族を扶養するには、夫と妻の労働をいっしょにして、おつうの労働

働の最低の種類においてさえ、かれら自身の維持に正確に必要なところよりも、いくらかおおくをかせぎえなければならない、ということである。(上63)

【竹内訳】

よって一家族を養育するために、夫婦諸共の労働は、最低種類の普通労働ですら、夫婦自身の生活維持上正に必要なところよりも幾分多くかせぎ得るにちがいないということまでは、少くとも、確からしい。(上93)

【大河内監訳】

そういうわけで、最低種類の労働の場合でさえ、一家族を扶養するためには、夫と妻の労働をいっしょにして、かれら自身の生活の維持に正確に必要なものよりもいくらか多くを稼がなければならないということは、少なくともたしかなことのように思われる。(116-117)

The wages paid to journeymen and servants of every kind must be such as may enable them, one with another, to continue the race of journeymen and servants, according as the increasing, diminishing, or stationary demand of the society may happen to require.

(竹内, p. 59: I, p. 82)

【大内・松川訳】

あらゆる種類の渡り職人や使用人に支払われる賃銀は、その社会がたまたま必要とする需要が増加しているか、減少しているか、または停滞しているかに応じて、渡り職人や使用人の一族を平均的に存続させるようなものでなければならないであろう。(→253)

【水田訳】

あらゆる種類のやとい職人や召使に支払われる賃銀は、かれらが全体としてやとい職人と召使との種族を、社会の増大、減少、静的な需要がそのときどきに必要とするにおうじて、存続させるものな

ければならない。(L74)

〔竹内訳〕

各種の年期上り職人や使用人に支払われる賃銀は、たまたまその社会の増進する、減退する、或は不動な、需要の必要とするに応じて、能く彼等が、種族全体として、年期上り職人や使用人の種族を維持し続けて行きうる底のものでなくてはならぬ。(L109)

〔大河内監訳〕

あらゆる種類の職人や使用人に支払われる賃銀は、その社会がたまたま必要とする需要が増加していようと、減少していようと、停滞していようと、それぞれにおうじて職人と使用人の階層を全体として維持しつづけていくことができるようなものでなければならない。(137)

"But if a person's situation is such, that it is doubtful whether he is actually removeable or not, he shall by giving of notice compel the parish either to allow him a settlement uncontested, by suffering him to continue forty days; or, by removing him, to try the right."

(竹内, p. 64 : I, p. 138)

〔大内・松川訳〕

しかしながら、もしある人が実際にたちのかせられるかどうか疑わしいような境遇におかれているばあいには、その人は、届出をだすことによって教区を強要し、ひきつづき四十日の居住を容認させ、無条件に定住を許可させるようにするか、それともたちのきを命じさせ、その権利を審理させるようにするか、のいずれか一つを選ぶことになるであろう。(→369)

〔水田訳〕

けれども、ある人がじっさいに移動させられるかどうか、うたがわしい状態にあるときは、かれは、とどけをだすことによって、教区にたいして、かれが四十日継続するのをがまんして、あらそう余地のない

定住権をかれにあたえるか、それともかれを移動させることによって
権利を行使してみるかの、決定をせまることになるだろう。 ((上)123)

〔竹内訳〕

しかしそれにしても、もし或人が実際他へ移さる可きや否や疑問の状態にある場合には、その者はこの届出をすればそれによって文句なしに、当該教区をして、彼を四十日間引続き居住させて議論の余地のない住所を許すか、或は他の教区へ移してその権利の有無をためしてみるか、させることになるのである。 ((上)189)

〔大河内監訳〕

しかし、もしある人が、実際によそへ退去させるべきかどうか疑わしいような場合には、その人が届出をすれば、それによってその教区に次のどちらか一方を選ぶことをせまることになるのである。すなわち、かれに四〇日間ひきつづき定住させて議論の余地のない定住権をかれに与えるか、またはかれを他の教区へ移して、その権利の有無をためしてみるか、である。 (229-230)

Land in its original rude state can afford the materials of cloathing and lodging to a much greater number of people than it can feed. In its improved state it can sometimes feed a greater number of people than it can supply with those materials; at least in the way in which they require them, and are willing to pay for them.

(別宮, p. 229: I, p. 162)

〔大内・松川訳〕

土地は、その原始状態のもとでは、食をあたえるよりもはるか多数の人に衣・住の材料を提供することができる。ところが、改良された状態のもとでは、それは衣・住の材料を供給しうるよりも多数の人に食をあたえうるばあいもあるのであって、すくなくとも人々がこれらの材料を必要とし、またこれらの材料に対してよるこんで支払をするというのであればそうである。 ((二)42)

〔水田訳〕

土地は、その原始未開の状態において、それがやしないいうよりもずっと多数の人々に、衣服と住居の材料を提供することができる。その改良された状態においては、土地は、それらの材料を、すくなくとも、人々が必要とし、しかも支はらおうとするやりかたで供給しうる人数よりも、多数の人々をやしないいうことが、ときどきある。(H144)

〔竹内訳〕

原始未開の状態にある土地は、その養いうる人数よりも遙かに多数の人人に衣住の原料を供給し得る。然るに、改良された状態にある土地は、衣住の原料を、少くともそれを需要し、進んでその代償を払う様にして、供給し得る人数よりも、多数の人人を養い得ることが往々ある。(H222)

〔大河内監訳〕

土地は、原始未開の状態のもとでは、その養いうるよりもはるかに多くの人々に衣と住との材料を提供することができる。そして土地の改良がすすんだ状態のもとでは、時として、衣と住との材料を提供しうるよりもはるかに多くの人々を扶養することができる。少なくとも人々がこれらの材料を必要とし、よろこんでそれにたいして支払おうとする場合にはそうである。(269)

In some parts even of the British dominions what is called A House, may be built by one day's labour of one man.

(別宮, pp. 226-7: I, p. 164)

〔大内・松川訳〕

ブリテンの諸領土のある地方でさえ、いわゆる「一戸の家」というものは、一人の人間の一日分の労働で建てられるであろう。(C46)

〔水田訳〕

ブリテンの諸領土の若干の部分においてさえ、A型家屋とよばれるものは、一人一日の労働で建築しうる。(上146)

〔竹内訳〕

イギリスの諸領土内の或る地方ですら、一人一日の労働で出来上りそれでも結構「家」と呼ばれるものができる。(上224)

〔大河内監訳〕

大ブリテンの領土内においてさえ、まがりなりにも「家」と稱することができるほどのものなら一人の人間の一日分の労働によって建てることができよう。(272)

Cloathing and lodging, household furniture, and what is called Equipage, are the principal objects of the greater part of those wants and fancies.

(竹内, pp. 75-76: I, p. 164)

〔大内・松川訳〕

衣服・住居・家具およびいわゆる什器は、これらの欲望や道楽の主要な対象である。(二46)

〔水田訳〕

衣服、住居、家庭内の調度品およびいわゆる身のまわりの道具は、それらの欲求や嗜好の大部分の、主要な対象である。(上147)

〔竹内訳〕

衣服、住宅、家具及び所謂馬車などは、これらの欲望嗜好の大部分の主たる対象である。(上225)

〔大河内監訳〕

衣服、住居、家具、いわゆる馬車一式などが、それらの欲望や好みの

主な対象である。(273)

Food is in this manner, not only the original source of rent, but every other part of the produce of land which afterwards affords rent, derives that part of its value from the improvement of the powers of labour in producing food by means of the improvement and cultivation of land.

(別宮, pp. 234-5: I, p. 165)

〔大内・松川訳〕

こういうふうにして、食物は、地代の本源的な源泉であるばかりでなく、そのあとになって地代を生じる土地生産物のあらゆる他の部分もまた、その価値のなかの〈地代に帰すべき〉この部分を、土地の改良や耕作による食物生産の労働力の改善からひきだすのである。(C48)

〔水田訳〕

食物はこのようにして、地代の本来の源泉であるだけでなく、土地の生産物のうちで、のちに地代を提供するようになる他のすべての部分は、その価値のその〔地代の〕部分を、土地の改良と耕作による、労働が食物を生産する力の改良から、ひきだすのである。(L147)

〔竹内訳〕

かくして食物は、ひとり地代の本源たるのみならず、また土地の生産物の中後で地代を生ずるに至るものは、その価値のこの部分〔地代〕を、土地の改良及び耕作による、食物生産上の労働力の推進から取得するのである。(L225-6)

〔大河内監訳〕

このようにして、食物は地代の本源的な源泉であるばかりではない。のちになって地代を生じるあらゆる他の部分の土地生産物は、その価値の中の地代部分を、土地の改良や耕作による食物生産の労働力の改善から引き出すのである。(274)

This accordingly has been the case with most of these things upon most occasions, and would have been the case with all of them upon all occasions, if particular accidents had not upon some occasions increased the supply of some of them in a still greater proportion than the demand.
(別宮, p. 235 : I, p. 176)

〔大内・松川訳〕

したがって、以上のことは、たいていのばあいたいていのものについての事実であったし、もし特殊の偶然事が、あるばあいにこのうちのある物の供給を、それに対する需要よりもなおさら大きな割合で増加させるようなことがなかったならば、以上のことは、すべてのばあいすべての物についての事実であったであろう。(二)70-71)

〔水田訳〕

したがってこのことは、たいていのばあいに、これらのうちのたいていのものについて、事実であったのであり、そして、もし若干のばあいに特殊な偶発事件が、それらのうちのあるものの供給を、需要よりもさらにおおきな割合で増大させることがなかったならば、それらのすべてについてあらゆるばあいに、事実であったであろう。(上)156-7)

〔竹内訳〕

従って、このことは大抵の場合、これらの物の大部分においてそうであった、そしてもし或特殊の出来事が起って或場合に、その中或物の供給を、その需要よりも大きな割合で増すようなことがなかったならば、凡ゆる場合において、これ等のものの全部についてそうであったであろう。(上)239)

〔大河内監訳〕

このことは、多くの場合、これらの物の大部分についていえることであった。また特別な事態でも起きて、これらのうちのある物の供給を需要よりもずっと大きい割合で増加させるようなことでもないかぎり、

以上のことはすべてについていえることであっただろう。(291-2)

The discovery of new mines, however, as the old ones come to be gradually exhausted, is a matter of the greatest uncertainty, and such as no human skill or industry can ensure.

(竹内, p. 80: I, p. 236)

【大内・松川訳】

とはいえ、新鉱山を発見するということは、旧鉱山がしだいに採掘しつくされているということと同じように、最大限に不確実なことであって、どのような人間の熟練や勤勉も保証しえないことに属している。(二)194)

【水田訳】

けれども、ふるい諸鉱山はしだいにほりつくされてくるのだから、あたらしい諸鉱山の発見は、もっとも不確実なことながら、どんな人間の技倆や勤労も保証しえないようなことながらである。(上)210)

【竹内訳】

しかし、新鉱山の発見ということは、旧鉱山の漸次涸渇して行くに従って、最も不確実のこととなるし、また人間の熟練又は勤労を以て到底保障しえないことである。(上)314-5)

【大河内監訳】

だが、旧鉱山が次第に枯渇してゆくとしても、新鉱山の発見は極度に不確実なことであるし、いかなる人間の熟練や勤勉をもってしてもこれを保証しうるものではない。(383-4)

Silver very seldom appears except in the change of a twenty shillings bank note, and gold still seldomer.

(別宮, p. 227: I, p. 280)

〔大内・松川訳〕

銀貨は二十シリングの銀行券の両替に用いられる以外にはごくまれにしか見られず、金貨となるとなおさらまれである。(二)271)

〔水田訳〕

銀は、二十シリングの銀行券のつり銭にふくまれるのをのぞけば、きわめてまれにしかみられないし、金はさらにまれである。(上)251)

〔竹内訳〕

銀貨は廿シル銀行券を小さくくずすときの外は見る事甚だ稀で、金貨はなおさらそうである。(上)370)

〔大河内監訳〕

銀貨は二〇シリングの銀行券を小さくくずすとき以外は減多にみられないし、金貨となると、なおいっそうまれである。(454)